逢ふことの絶えてしなくばなか〳〵に人をも身をもうらみざらまじ

を「詞きよげなり」といひ、

行く春のとまりししるきものならば我も舟出を遲れざらまし

を「詞たくみたるやうなり。歌がらもおとれり」と言つてゐるので、批評の大體が想像出來るであらう。

こほりだにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬうぐひすの聲

に對して「心ばへをかし」と言ひ

花だにも散らで別るゝ春ならばいとかくけふは惜まざらまし

を「ふるまひもありてをかし」と批評してゐるのが注目される。しかしながらこれとても、「こぼりだにとまらぬ」といふに對して「まだうちとけぬ」と言つた趣巧を「心ばへ」と言つたので、いはゞ言葉のあやつり方であり、「ふるまひ」といふのも言葉のうねり、しをりと言つた、いはゞ言葉のとりなしである。後者には象徴の意味もあつて詳しく論ずる必要があるけれども、こゝでは觸れないことにする。

この天德歌合ばかりでなく、歌合といふ歌合の判がまづ大同少異で、他をいふ必要がない。かういふやうに、詞がきよげで、くせなく聞え、あるひは上下うちあひ、言葉にふるまひがあつて歌がらのきよげであることが、いつでも歌を歌とするに必須な條件であつた。これらの問題は、言葉に浮身をやつす歌人にとつては、ほとんど問題にならないほどあたりまへのことであつて、今もかはらぬ原則的な條件である。しかもこれらの問題が批評としてはじめて表はれて來たことを思ふに、いかに批評のない時代であつたかを想像するに足りるのである。かういふ時代に公任の新撰髓腦が表はれたのは、批評精神の目覺めとして、曉の聲のやうに新しい響だつたにちがひない。

公任の新撰髓腦が新しい批評精神の目覺めだといふのは、「凡そ歌は心深く、姿清げにて、心にをかしきところあるをすぐれたりといふべし」といひ、「心姿相具すること難くば、まづ心をとるべし。遂に心深からずば姿をいたはるべし」と言つてゐる點である。彼がこゝに「心深く」と言つてゐるのは、九品和歌に「言葉たへにして、あまりの心さへあるなり」「ほどうるはしくて、あまりの心あるなり」「こゝろふかゝらねど、おもしろきところあるなり」などゝ言つてゐる「あまりの心」あるを意味し、「心にをかしきとある」といふのは「こゝろふかゝらねど、おもしろき所あるなり」とあるおもしろき所と言ひ、「すこしおもひたる所あるなり」「わづかにひとふしあるなり」「ことのこころむげにしらぬにもあらず」といふ「すこしおもひたる所」「ひとふし」「ことの心を」しるといふほどの意味であること明かである。心にをかしき所あるは、すでに天德歌合に表はれてゐる「心ばへをかし」や「ふるまひありてをかし」とまつたく同じ意味で、別にことあたらしく論ずるまでもないが、こゝにいふ「心深き」あるひは「あまりの心」は、はじめて表はれて來たもので、批評精神の「めばえ」を見ることが出來るのである。九品和歌に上品の上としてあげてゐる

ほのぼのと明石の浦のあさ霧にしまがくれゆく舟をしぞ思ふ

春たつといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらむ

の歌は、「言葉たへ」なるうへに「あまりの心さへ」あるといふ。あまりの心とは、明石の浦の朝霧のなかをゆく舟を見つゝ、しまがくれゆく行方へまでも思ひやる心であり、たちそめし朝霞に春のたちしを知るといふばかりで

なくみ吉野の山までも思ひやる心である。現實を現實として見るだけでなく、何となしに觀念的の美がなければならない。いはゞ現實のうへに觀念的のうす絹をかけて見る心である。

　　み山には霰ふるらし外山なる正木のかつらいろづきにけり

　　まふさかの關の清水にかげ見えていまやひくらん望月の駒

は、上品の中で「ほどうるはしくて、あまりの心」のある歌である。外山の正木のかつらのいろづいたのを見て、「み山には霰ふるらし」とおもひやる心、あふさかの關の清水を掬びながら、秋らしくなつて來たおもひから「かげ見えていまやひくらん」と望月の駒を都へひきのぼる頃をおもひしのぶ心、いづれも「あまりの心」で、現實を超えた世界に動きゆく心である。これはさらに上品の下として「こゝろふかゝらねども、おもしろき所」ある

　　世のなかにたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

　　望月の駒ひきわたす音すなり瀬多のたかみち橋もとゞろに

を見れば一層明かになつて來ると思ふ。この歌が「こゝろふかくないのは、現實を超えて動きゆく心がないからである。「世のなかにたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」と言つても畢竟現實の心もちである。のどかな春を樂しまうとする心といふよりも、むしろ櫻を賞する心を反語的に歌つてゐるのであつて、觀念的の美はない。「望月の駒ひきわたす音すなり」は、まつたく現實を現實として歌つてゐる。しかし彼等にとつては、さういふ現實の經驗がないにかゝはらず、現實的に歌つてあるのをかしと言つたものと思はれる。あまりの心がないことは心深くないことになる。これらの歌を通じて、あまりの心は餘韻といふやうに解してもいゝやうに思はれる。とにかく、公任が歌をかゝる態度で見たといふことは、從來歌が言葉のうへからのみ云爲されてゐたのに對して、新しい目覺めでなければならない。

　貫之が古今集の序文において、六歌仙の人々を批評して「僧正遍昭は、歌のさまは得たれどもまことすくなし。たとへば繪にかける女を見ていたづらに心を動かすが如し。在原業平はその心あまりて言葉たらず、いはゞしぼめる花の色なくて匂のこれるがごとし。文屋康秀は詞たくみにてそのさま身におはず。いはゞあき人のよき衣着たらんが如し。宇治山の僧喜撰は詞幽にしてはじめをはりたしかならず。いはゞ秋の月を見るに曉の雲にあへるが如し。よめる歌多く聞えねばこれ彼れを通はしてよくしらず。小野小町はあはれなるやうにて強からず。いはゞよき女の惱めるところあるに似たり、強からぬは、をうなの歌なればなるべし。大友黒主は心はをかしくてそのさまいやし、いはゞたき木負へる山人の花の蔭にやすめるが如し」と言ひ、歌の心と言葉と姿とを問題にしてゐることに就いてはすでに述べたところであるが、これを總合して考へるに、貫之の理想は、この心と言葉と姿と三つのものが、完全に一致したところに完璧な歌を求めてゐたことは、容易にこれを想像することが出來る。すなはち心をかくして詞たくみにあはれにして強く、心のまことが溢れてゐて、しかも歌の姿がこれに相應してゐなければならないのである。

　しかるにこの心と言葉と姿とは、表現的の立場から考へれば常に一致しなければならない筈であるが、「歌のさまは得たれどもまことすくなし」とか「心あまりて言葉たらず」といひ、「心はをかしくてそのさまいやし」といふのは、貫之が歌を表現的なものとして考へてゐなかつた證據で、內面的に有機的の關係あるをよそにして考へてゐた

所以である。しかもこの「心」の意味が、公任のいふ「心ふかき」「あまりの心」あるといつた「心」とはちがつてゐる。むしろ公任の「心におかしきところある」「心ふかゝらねど、おもしろきところある」「すこしおもひたる所」「わづかにひとふしある」などゝ言つてゐる意味に近いものである。公任の「心ふかき」「あまりの心ある」は風情を求める心であり、貫之の「心」は、心を種としていかに工夫を凝らすか、その趣巧のしかたである。だから「詞たくみにてそのさま身におはず」も「心をかしくてそのさまいやし」も、その間にいくばくの隔りもないのである。あき人のよき衣着た姿と、たき木負へる山人の花の蔭にやすめるとは、殆んどその間に逕庭がない姿である。こゝに公任の「心深き」「あまり心ある」を風情を求める心である。と言つたが、風情といふは感情にある姿態である。象徴的の意味においては、具象の姿を感情の表現として見ることであり、觀念論的に言へば、自然をありのまゝに見ないで、ある觀念のうす絹を着せて見ることである。したがつて公任の「心ふかき」といひ「あまりの心」と言つてゐるところには、觀念的の意味を認めることが出來るのである。

かくて公任の新撰髓腦には、今までに見られなかつた、新しい批評精神を覗ふことが出來るのである。さうしてこの批評精神は古今集に拓かれた「はかなさ」「あはれさ」が發展して觀念的の姿をとらうとして、まづ表はれたものだといふことが出來る。

けれどもこの「あはれさ」と「はかなさ」は、公任によつて、漠然と歌の餘韻、風情として、たゞ「心深き」「あまりの心」といふやうな言葉によつて指摘されたゞけで、むしろ歌は叙景的の方面に平淡となり、流暢をよろこぶといつた傾向から無名抄に「拾遺のころより、その體ことの外もの近くなりて、ことわりくまなく表はれ、姿すなほなるをよろしとす」といふ風に批評されてゐることは、すでに前に述べたとほりである。しかしこの平淡流暢さは叙景的の傾向によつて生れたものではなく、公任が「姿きよげ」なのをよしとし「こゝろことばとゞこほらずしてをもしろきなり」などゝ言つてゐるところからも、あるひはさかのぼつて天德歌合あたりに「詞きよげ」で「くせなく」きこえ「するあはぬこゝちぞする」といつたのをわろしとしてゐるところからも、當時の一般の傾向であつたことが推察出來るのである。したがつて公任が歌の餘韻風情を第一義とし、流暢なのを第二義に考へて歌の趣くところを知らしめようとしたに拘はらず、大勢はこれを動かすことが出來なかつた。さうして古今集に拓かれた觀念的唯美的のこゝろは、公任の歌論に姿を表はしたゞけで、歌の世界からは遠のいて行つた。

この時代に表はれた革新兒、曾根好忠の新風は、言葉の新を求めたにすぎなかつた。この新風は經信俊頼父子によつて繼承され、叙景的で流暢で、しかも清新な詠風は一世を風靡して、金葉詞花の二勅撰となつて表はれてゐる。進むことを知つて顧みることを知らなかつたのである。公任の歌論は貫之を顧み、貫之を源として發展して來たものを、ふつゝかながらも歌論の形にして示したものである。俊成が出るに及んでふたゝび貫之が顧みられ、公任に目覺めた批評精神がさらに深められた。俊成の幽玄の思想は、公任の餘韻風情を第一義とする精神の繼承であり發展である。「心深」く「あまりの心ある」を要諦として、創作のうへに生かすことを努めたのである。王朝時代を通じて、生活の基調をなして來た觀念的の美である「あはれさ」「はかなさ」は、すなはち幽玄の核心を成すものである。

俊成の言葉に「おほかた歌は、必ずしもをかしきふしを言ひ、ことの理をいひきらむと せされども、もとより詠

歌といひて、たゞ詠みあげたるにも、うちながめたるにも、何となくえむにも幽玄にも聞ゆることのあるなるべし。よき歌になりぬれば、その言葉姿の外に、景氣のそひたるやうなることのあるにや。例へば春の花のあたりに霞のたなびき秋の月の前に鹿の聲を聞き、垣根の梅に春の風の匂ひ、峯の紅葉に時雨のうちそゝぎなどするやうなる事のうかびてそへるなり。云々」とあるは、ひとくちに言へば餘韻風情である。公任はこれを先人の跡に學んだけれども、創作のうへに表はれるほどに深く感情生活を支配するに至らなかつた。彼の他の學問に於けるやうに知識にすぎなかつたからである。俊成は先人のこゝろを創作に學んだ。ひとへに先人のこゝろを心として創作に專心した。彼の前には俊賴がゐる。金葉詞花によつて拓かれた新風がある。公任とは環境と位置がすでに違つてゐる。客觀的に、ありのまゝに、平淡に、しかも清新にといふだけに滿足しきれない心を、觀念的に深めようとした。さうしてその觀念的なものはたゞ「はかなく」「あはれ」であるだけでなく、唯美的に優に艶なるばかりでなく、黃昏の光のやうな「さびしさ」を得た。「蘭省花時錦帳下」だけでなく「蘆山夜雨草庵中」の心境を學んだ。王朝時代を支配して來た自然哀觀の態度は、俊成の歌論として大成されたかの感があるのである。西行のごときはかういふ空氣のなかに、自然にこの境に至り得た歌人である。後鳥羽院が「西行は天成の歌人」であると仰せられたのは、西行が別に自然哀觀を目がけてゐたわけではないが、彼の生活がおのづから自然哀觀の境涯にあつたために、彼の奏づる自然の聲が、おのづからにして幽玄の境に出入してをつたのを指摘されたのである。それはともかく、王朝時代を支配して來た。優に艶にしてしかもはかなくあはれなる、唯美的にして觀念的の美の世界は、俊成の幽玄にいたつて、歌の世界に完全な生長をとげたのである。

結語

さて古今集時代から發達して來た筈の觀念的唯美的のこゝろは、公任の歌論にわづかにその姿を表はしたゞけで、歌の世界には表はれなかつたけれども、拾遺集の時代において散文の世界に物語となつて表はれ、隨筆となつて表はれた。その代表的なるものを源氏物語とする。

紫式部がおそらく一生涯をかけて磨きに磨き、自分の半身として愛惜したと思はれる源氏物語五十四帖は、實に和歌を基調として開けて來たくさぐさの文學を、渾然とした大きな世界にまとめあげたものである。あらゆる藝術に對する理解をもつて織りなされた王朝文學の殿堂である。しかしその根底をなすものは和歌によつて練磨された言葉に對する深い理解である。おそらく和歌なしには源氏物語は表はれ得なかつたであらう。

伊勢物語大和物語は言ふまでもなく、土佐日記がすでに和歌の變形である。竹取物語、宇津保物語、落窪物語にしても、あるひは同時代に表はれて亡びて行つた多くの物語にしても、日常生活を支配してゐた和歌に對する深い興味や理解、乃至はその教養がなかつたならば、表はれてゐなかつたかも知れない。日本文學の精粹として誇り得る王朝文學は、和歌の黎明とともに孕まれてゐたわけである。和歌の黎明がやがて自國の文學に對する目覺めであり、王朝文學に對する呼びかけの第一聲であつたといふことは、すでに前にも述べて來た。

暗黑時代を經て復活された和歌は、萬葉集の表現的態度に對して技巧的態度のものであつた。技巧的態度の歌は、表現的態度の歌のやうに對象の直接なる表現を求めない。表現の對象が、主觀的であると客觀的であるとをとはず、

ある觀念的の立場から加工されなければならない。加工されたものは言葉の花として表現される。加工されないきぢのまゝの對象は美として顧みられない。きぢのまゝの對象がいかに言葉の花を裝ほつても、「詞たくみにてそのさま身におはず」と批評され、對象がいかに加工されても、言葉の花がなければ「心はをかしくてそのさまが」いやしとされる。いはゞ花實相具つたものでなければならない。かくて言葉の花と匂ふものは、霞をとほして來る柔かい春の光のやうにほのかな美である。さういふ柔かくほのかな美に陶然として醉ひ、陶然として夢心地になつてゐたのが彼等の生活である。だから何を見るにも優に艶なる姿でなければならないし、はかなくあはれでなければならない。隈なくすみのぼる月かげに、心ゆくまで笛をふきすます。心は月の光と笛の音にあやしくも澄んでゆく。「行く方なく月に心はすみすみてはてはいかにかならんとすらん」といふやうな境涯である。かういふ心境を王朝時代の人々は「さみしい」といつた。源氏物語の夕顔の君をおもかげに芭蕉は「ゆく月のうはの空にて消えさうに」と歌つてゐる。このあはれにはかない心境は「さみしい」といふ心にも影なして「心ぼそい」こゝろでもある。すべてが薄明の光のなかにある美しさなのである。輪廓のはつきりしたものは「けそう」であり「あらは」である。枕草紙に「月のいとあかきに、やかたなき車にあひたる」を似げなきものとしてゐるのは「けそう」にすぎるからであらう。あるひはまた「布屏風のあたらしき。ふりくろみたるは、さるいふがひなき物にて、なか〳〵何とも見えず。あたらしうしたてゝ、櫻の花多くさかせて、胡粉朱砂などいろどり、えどもかきたる」をいやしげなるものとして、美を認めない。さうして「薄色にしらがさねのかさみ」をあてなる美とする。しかしさらに「いみじうしつらひたる所の、おほとなぶらはまゐらで、長すびつにいと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいとつややかに見えたるいとめでたし。みすの帽額上卷などに、このさはやかなるもけさやかに見ゆ」るを心にくき美として歎美する。

さらに清少納言が、あはれなるものとして「九月三十日、十月一日のほどに、たゞあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの聲。」や「秋ふかき淺茅に、露のいろいろの玉のやうにて光りたる。川竹の風にふかれたる夕ぐれ、あかつきに目さましたる」を言ひ、「はつかあまり六七日ばかりのあかつきに、物がたりしてゐあかして見れば、あるかなきかに、心ぼそげなる月の、山のは近く見えたるこそあはれなれ」と言ひ、あるひは、「あれたる家にむぐらはひかゝり、よもぎ高く生ひたる。庭に月のくまなくあかき。いとあらしはあらぬ風の吹きたる」またはたゞ「山里の雪」「秋の野」と言つてゐるのを見れば、「あはれ」の内容に「心ぼそさ」「さみしさ」あるひは「はかな」げなる心もちが複雜に織りこまれてゐることがわかる。さうしてこれが歌に詠まるべき題材の世界であり、歌に求められる筈の心もちであつたのである。

かくて歌として發展すべきであつたものが、すべて散文の世界に吸收され、散文の世界において育ぐまれた。さうして和歌は來るべき時代を待つて新たなる方面に拓けて行つた。和歌が當然行くべき方向に發展しないで、新しい方向にそれては行つたけれども、なほ常識としての和歌は、彼等の日常生活を支配する要具として、ことばのあはれさがふかく生活を浸し、心と心との交渉を柔かくほのかに、黄昏の光に動く影繪のやうに、いつも幻覺のなかにあるかのおもひに誘ふ働きをしてゐた。したがつて和歌そのものから「あはれさ」と言ひ「はかなさ」といふ觀念的な深さは失はれて行つたけれども、和歌のあまねき浸潤が、散文文學をあれだけに發達せしめる根幹となり、契機となり、酵母となつてゐたことは、くり返して言ふまでもない。

俊成が源氏物語を尊重したのは。和歌に失はれたものを、ふたゝび和歌に復活させようとしたためであることは明かである。俊成が源氏物語に學んだものは、今まで述べて來たやうな觀念的の「あはれさ」「はかなさ」である。彼の幽玄は畢竟古典の世界に潜んで探り得た傳統的精神である。傳統を離れては新しき世界は拓けない。

源氏物語を中心としてまだ語るべきものが多々ある。もつと詳しく俊成の幽玄に至る王朝文學の起伏が語られなければならない。まだ王朝文學の半ばを語つたにすぎない。王朝文學の極盛時代を前にして筆を擱かなければならないのは遺憾であるが、豫定以上の頁數を費してゐるからやむを得ない。結語として王朝文學の基調特質の概略を述べて筆を擱くことにする。他日源氏物語を中心として筆をとる機があるを信ずる。

完

昭和十年一月十五日印刷
昭和十年一月二十日發行

國文學大講座 第一五
王朝文學概說
定價一圓八拾錢

王朝文學概說

編輯兼發行者 國文學大講座刊行會
代表者 吉川與志次

印刷者 吉川與志次
東京市神田區小川町三丁目二四

◇發行者 東京市神田區小川町三丁目二四
日本文學社

國文學大講座 各專門大家執筆

◉本書は嘗て本會に於て出版して嘖々の好評を博し本書のみによつて文檢に合格した篤學の士數百、引續き本會は續國文學講座江戸文學講座を出版しましたが國文學大講座は三書の內特に文檢受驗者必須なるものを選擇統一したものである。

◇國文學史	文學博士 藤井乙男著	菊判 三〇〇頁	送料 二錢
◇國語學史（併概說）	文學博士 吉澤義則著	菊判 四〇〇頁	送料 二錢
◇古事記選釋	三高教授 阪倉篤太郎著	菊判 三八六頁	送料 二錢
◇萬葉集選釋	京大助教授 澤潟久孝著	菊判 二八八頁	送料 二錢
◇源氏物語講義	奈良女高教授 岩城準太郎著	菊判 四〇二頁	送料 二錢
◇枕草子選釋	三高教授 島田退藏著	菊判 四五〇頁	送料 二錢
◇平家物語講義	東京女高師教授 石川佐久太郎著	菊判 二一二頁	送料 二錢
◇古今和歌集選釋	文學博士 尾上八郎著	菊判 二一二頁	送料 二錢

國文學大講座 各專門大家執筆

◇文法及口語法	奈良女高師教授 木枝增一著	菊判 六五六頁	送料 三錢
◇言語學概論	文學博士 新村出著	菊判 三一八頁	送料 二錢
◇謠曲講義	東京文理大教授 能勢朝次著	菊判 三三六頁	送料 二錢
◇有職故實	風俗研究所長 江馬務著	菊判 三五六頁	送料 二錢
◇俳句選釋	京大助教授 頴原退藏著	菊判 三二六頁	送料 二錢
◇新古今和歌集講義	女子學習院教授 佐成謙太郎著	菊判 二一六頁	送料 二錢
◇王朝文學概論	文學博士 吉澤義則著	菊判 二一〇頁	送料 二錢
◇國文學問題詳解	京都女專教授 田中健三著	菊判 三五八頁	送料 二錢
◇近世和歌史	東京文理大教授 能勢朝次著	菊判 三四二頁	送料 二錢

國文學大講座 各專門大家執筆

◇江戸文學概說	文學博士 藤井乙男 著	菊判 二二八頁	送價 二十二錢
◇更科、泉式部、紫式部日記講義	宮田和一郎 著	菊判 二二四頁	送價 二十二錢
◇西鶴五人女評釋	鈴木敏也 著	菊判 二二三頁	送價 二十二錢
◇大鏡增鏡類選釋	金子原亮一 堀江秀雄 荒瀨邦介 著	菊判 二三五頁	送價 二十二錢
◇保元物語大平記選釋	清水泰 齋藤清衛 著	菊判 二二三頁	送價 二十二錢
◇徒然草講義 十訓抄講義	女高師教授 金子彥二郎 木枝增一 著	菊判 二二二頁	送價 二十二錢
◇江戸時代風俗史	風俗研究所長 江馬務 著	菊判 二一二頁	送價 二十二錢

610
200

終